

こつざい 交差点

大阪市立大学
名誉教授

山田 優

全国組織「再生骨材コンクリート普及連絡協議会」が一昨年の11月に設立された。再生骨材コンクリートの研究は40年ほど前にさかのぼる。構造用コンクリートに使用可能な良質再生骨材の製造については、30年ほど前にケイコンが故西堀忠信大阪市立大学教授の指導で実験プラントを設けて研究し、近畿技術事務所が構内の土木構造物に適用する試験施工が行われた。事業として再生骨材を製造し生コン販売を開始したのは京星で、14年前のことだ。再生骨材のJIS制定は7年前になる。こうした長い道のりを経てようやく再生骨材コンクリートの全国的普及が始まった。

とはいえ、本紙175号の記事によると、再生骨材コンクリートの出荷量は協議会加盟会員9社

コンクリートリサイクルの普及

で06年度11万㎡であったが、その後は減り続けている。生産される再生骨材のグレードもH、Mもあるが、Lが多い。

再生骨材の品質と生産の採算性を高めるには、高品質骨材製造の能力を持つ施設に良質なコンクリート塊を集めることが肝要だ。旧態依然として「処理して処分」の時代のまま、大まかに「がれき類」として集めるのではなく、コンクリート用骨材の製造に適したコンクリート塊とその他、路盤材等用再生碎石にするものとを分けて集める必要がある。

ところで、再生碎石からの六価クロム溶出が依然として問題とされる。いったいどの程度の濃度、頻度で検出されるのか知らないが、それを明らかにし、早く有効な対策を講じるべきである。コンクリート塊をもっぱら碎石業者が受け入れていけば、新材と混合して路盤材等にするので、こうした問題は生じなかつただろう。コンクリート用骨材としての再利用ももっと早く進んだのではないだろうか。